そこに学校があった
休廃校の歴史

大奈路小学校 下道分校（下）

平成以降に休廃校になった学校を中心に振り返ります。

保育所も兼ねていた？

運動場らしい運動場は無くても、子どもたちも大人たちも元気いっぱい。前述の、1956（昭和31）年に赴任した教員も、地域住民との約束通りの獅子奮迅ぶりであった。赴任早々驚いたことの一つが未就学児のことである。下道地区には保育所は無く、1954（昭和29）年に開設された大奈路保育所に行くには、まだまだ道路事情も悪い。そもそも、自動車も普及していない。そんな時代だったから、幼児を保育所に通わせるということは、下道では、ほぼ不可能と言えた。

では、下道の幼児たちは、日中はどのような過ごし方をしていたのか。何と、多くの幼児たちは小学校に通っていたのである。ほぼ毎日、1年生の教室（複式なので1・2年生の教室）に通っていた。これは一体どういうことかと言うと、親が働いている時間は子どもたちに目が行き届かない。しかし学校に行けば教員たちがいる。それに、学校へ行けば、普段の遊び相手たちがいる。何といっても彼らは一日中「暇」なのである。暇つぶしでもあり、遊ぶためでもあり、安全のためでもあった。


みんなでチョキチョキ！散髪風景

幼児と言えど、場が人を作る！

幼児たちは、教室の後ろの方に机と椅子を用意してもらっていた。前では「正規の授業」が行われていて、それを聞くともなく聞いているのである。見るともなく見ているのである。騒ぎたい盛りの幼児たちであったが、意外なことに、静かにしていたのだそうだ。不思議なもので、場は人を作る。学びの場に身を置くと、幼児であっても学ぼうとするもののようで「みんな、一応、帳面を持ってきよった」という。誰が名付けたかはわからないが、この幼児たちを皆は「見習いさん」と呼んでいた。「来ていたのは5～6歳児だけではなくて、もっと小さな子も来ていたので、おむつのお世話もしてました」と当時の教諭は笑う。

さて、この見習いさんたち、学習面において予想外の効果を見せた。彼らが「本入学」の年齢に達し、晴れて1年生になった時点で、すでに1年生の授業は「ほぼ全てわかった状態だった（当時の見習いさん談）」という。それもそのはず、1年生で履修すべき課程を見習いさん時代に修了していたも同然だったからである。

入場料は要らんかえ？

当時は教育不利地域とも言えた山深い地域で学ぶ、子どもたちの学力向上のために奮闘した教員や地域住民たちの姿には頭が下がる。設備といえば、オルガンとラジオが一台ずつ。そこで、教員が方々に働きかけ、住民たちの協力を得て、電話を設置し、テープレコーダーとテレビを設置。ただし、テレビを設置しただけでは映らない。行政にかけあって「山のてっぺんにアンテナを設置してもらいました」という。テレビ導入は、教育番組を子どもたちに見せることが最大の目的であった。特に理科の実験。実験道具が揃わない分校の子どもたちに、せめて映像だけでも見せてあげたかったのだ。子どもたちの目の輝きはどれほどであっただろう。子どもたちだけではない。大人たちも大喜びであった。これまでラジオで熱狂していた大相撲を、映像で観戦できるようになったのである。大相撲開催中は、地域住民がこぞって学校に集まった。「先生、入場料は要らんかえ？」とよく聞かれたそうだ。


新校舎落成（昭和38年）


新校舎が建った場所には運動場も確保できた！

地域住民と教員の固く温かい繋がりによって、子どもたちを守り、育て、伸ばし、羽ばたかせた下道分校。1969（昭和44）年の閉校は、皆にとって、どれほど辛く残念なことだっただろうか。分校跡には、地域住民によって今も管理され続けているプールがあるのだが、これは閉校にあたり、夏休みの子どもたちの安全のために作られたものだ。プールもそうだが、今も残る旧校舎を訪れると、その頃の人々の体温が伝わってくるような気がする。

そこにはいつも子どもたちがいた。そこに学校があった。（おわり）

町のうごき

（9月30日）	人　口	前月比
男	6,870	0
女	7,405	-10
計	14,275	-10
世帯数	7,740	-4

	出生	死亡	転入	転出
男	3	8	13	8
女	3	15	10	8
計	6	23	23	16

（9月中の届出）

窪川地域 10,214人　大正地域 1,957人　十和地域 2,104人

四万十町通信　2026.11月号　Vol.248（毎月10日発行）
●発行／四万十町企画課　●印刷／弘文印刷
〒786-8501　高知県高岡郡四万十町琴平町16-17　(0880) 22-3124　FAX (0880) 22-3123
UD FONT by MORISAWA　本文など内容の一部に見やすく読みまちがえにくいユニバーサルデザインフォントを採用しています。